弥生 愛南文芸

さわらび短歌会

御社の凍みつく苔に椎の実を　前田　知子
幸ひろふ如く拾ひて歩む
歌会終へ帰りを急ぐにおしみなく
冬の陽射しが我が身を包む　藤井　擴
前山の杉の木立に日がのぼる
見慣れし事も今朝は新し
夕影に耀ふ紅葉の中を行く　岩村千代子
京の古刹に身を遊ばせて
西窓ゆ入りくる夕陽深くなり
小寒の日射しややに柔らぐ　前田　充
盤面の先手を読みて指す藤井
余裕綽綽勝利を得たり　前田　昭夫

抗ガン剤治療を受ける君のため　河上　明美
祈りつつ編む青き帽子を
昨夜より仕込みし黒豆ふっくらと
つやよく炊けたり晦日の厨　松本マス子
また一つ居場所なくして年暮れる
馴染みの本屋に「閉店」の文字　門屋あけみ
弱気になる心をふるって書初めに
「克己」と書いて壁に掲げる　澤近　正弘
年の瀬に混み合い待ちいる美容室
まだ残りいる節目の習い　生田八寿子
部屋より望む裏山に三ツ又の黄の花
伸びて広がり咲きぬ　扇野八代生

菊川俳句会

晩酌の肴は今日も鰤大根　中川　一喜
読みかけの古本たんぽぽの栞　安岡留美子
やさしさは頬打つ春の雪のごと　福田　りさ
春駒の鈴しゃんしゃんと頂きぬ　浅野勇一郎
健やかなバレンタインデー君に　迦恋
冬霧に吸い込まれゆく通学児　和田　靖樹
佐保姫に利休白茶の格子帯　宇野　天弓
除夜の鐘今年初めの日を捲る　河野　孝
初もうで色とりどりの花手水　河野　清美